けや中だより

第６号
令和７年８月２８日(木)
三田市立けやき台中学校

終戦から８０年　～平和への願い～

◇７月末に行われた県総体や吹奏楽コンクールで、たくさんの活躍がありました。改めて、けや中生の底力を強く感じました。さて、今日から２学期が始まります。夏休みに経験したことや積み上げてきたものを活かして、さらに活躍してくれることを願っています。２学期は文化祭と体育大会という大きな学校行事が２つもあります。行事を通して、さらにみなさんが成長してくれることをとても楽しみにしています。

◇今年は戦後８０年という節目の年となりました。６日には広島で、９日には長崎で平和祈念式典が行われ、それぞれで平和宣言が読み上げられました。しかし、世界情勢をみると、米国とロシアが世界の核弾頭の約９割を保有し続け、またロシアによるウクライナ侵攻や混迷を極める中東情勢を背景に、世界中で軍備増強の動きが加速しています。こうした現状に強くとらわれ、「自国を守るためには、核兵器の保有もやむを得ない。」という考え方が強まりつつあります。こうした事態は、国際社会が過去の悲惨な歴史から得た教訓を無にすると同時に、これまで築き上げてきた平和構築のための枠組みを大きく揺るがすものです。

◇９日の長崎平和祈念式典で福山雅治さんの楽曲「クスノキ」が歌われました。この曲は原爆で焼かれながらも再び芽吹き、希望と平和の象徴となった被爆クスノキをモチーフにしています。長崎県で生まれ育ち、幼少期から戦争や原爆など祖父母の体験を聞いてきた福山さん。１０代のころから“ロックミュージシャンになって、いつか長崎への思いを歌にしたい”と考えていたそうです。“なぜ被爆クスノキがそこにいるのか、それは原子爆弾が投下されたから。どの立ち位置で僕がこの歌を歌えばいいんだろう、ずっと見つからなかった”　デビュー当時から構想はありながらも、曲が完成するまで２４年を要したと福山さんは明かされていました。

◇今年の６月、３年生のみなさんと共に修学旅行で長崎の地を訪れ、爆心地にて全員で作った平和宣言を代表生徒のみなさんが読み上げてくれました。二度とこのような悲しみを繰り返さないという強い決意を感じた宣言でした。その長崎の地で９日、長崎市長により、平和宣言が読み上げられました。以下に一部抜粋した内容を記載しますので読んでください。改めて戦争の酷さ、平和の大切さを感じてください。そして、自分たちは何をすべきか、しっかりと考えてほしいと思います。

２０２５長崎平和宣言（一部抜粋）

◇１９４５年８月９日、このまちに原子爆弾が投下されました。あの日から８０年を迎える今、こんな世界になってしまうと、誰が想像したでしょうか。「武力には武力を」の争いを今すぐやめてください。対立と分断の悪循環で、各地で紛争が激化しています。このままでは、核戦争に突き進んでしまう。そんな人類存亡の危機が、地球で暮らす私たち一人ひとりに、差し迫っているのです。

◇１９８２年、国連本部で被爆者として初めて演説した故・山口仙二さんは、当時の惨状を語り、演説の最後に、自らの傷をさらけ出しながら、世界に向けて力強く訴えました。「私の顔や手をよく見てください。世界の人々、そしてこれから生まれてくる子供たちに、私たち被爆者のような核兵器による死と苦しみを例え一人たりとも許してはならないのであります。「ノー・モア・ヒロシマ。ノー・モア・ナガサキ。ノー・モア・ウォー。ノー・モア・ヒバクシャ。」この心の底からの叫びは、被爆者の思いの結晶そのものです。

◇「人類は核兵器をなくすことができる」。強い希望を胸に、声を上げ続けた被爆者の姿に、多くの市民が共感し、やがて長崎に「地球市民」という言葉が根付きました。この言葉には、人種や国境などの垣根を越えて、地球という大きな一つのまちの住民として、ともに平和な未来を築いていこうという思いが込められています。この「地球市民」の視点こそ、分断された世界をつなぎ直す原動力となるのではないでしょうか。
◇地球市民である、世界中の皆さん。たとえ一人ひとりの力は小さくとも、それが結集すれば、未来を切り拓く大きな力になります。被爆者は、行動でそう示してきました。はじめの一歩は、相手を知ることです。対話や交流を重ね、互いに理解し、小さな信頼を重ねていく。これは、私たち市民社会の大きな役割です。地球市民として、共感と信頼を積み重ね、平和をつくる力に変えていきましょう。
◇原子爆弾で亡くなられた方々とすべての戦争犠牲者に、心から哀悼の誠を捧げます。被爆８０年にあたり、長崎の使命として、世界中で受け継ぐべき人類共通の遺産である被爆の記憶を国内外に伝え続ける決意です。永遠に「長崎を最後の被爆地に」するために、地球市民の皆さんと手を携え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くしていくことをここに宣言します。

２０２５年（令和７年）８月９日　長崎市長

“ 届けよう！ 服のチカラ ” プロジェクト

“届けよう!服のチカラ”プロジェクトとは、ファーストリテイリングさんがＵＮＨＣＲ（国連難民高等弁務官事務所）と共に取り組む小・中・高校生が対象の参加型の学習プログラムです。

「出前授業」と「子ども服の回収活動」で構成されるこの活動では、社員さんの「出前授業」で世界の紛争や難民問題について学び、「回収活動」では“着られる服を再利用する”という体験をします。そしてその活動が難民の子どもたちの命やくらしを守り、“自分たちも社会のために何かできる”という実感を得ることができます。今世界では、度重なる戦争によって大事な命を失ってしまう可能性がある方々がたくさんおられます。その中で、衣類は、保健、衛生面で大事な役割を担っていることを出前授業で学びました。そこで私たちは、「服で福を届けよう!」をスローガンに掲げ、服を届けて難民の方々に喜んでもらいたいと思っています。本当に大事なのは服を届けるだけでなく、「助けたい」「命を救いたい」という「気持ち」を届けることです。

そのために皆さんに協力していただきたいことがあります。１６０ｃｍまでの子供服で、着なくなった服がお家にあれば捨てずに提供をお願いします。子供服を集める回収ボックスはトライやる・ウィークでお世話になった校区の「北摂中央幼稚園」・「キッズポート保育園」・「けやき台幼稚園」・「すずかけ台小学校」・「けやき台小学校」・「すずかけ台コミセン」・「けやき台コミセン」「けやき台中学校」の８か所に、小中学校は９月１１日(木)まで、その他は９月５日(金)まで設置しています。難民の方々の笑顔のために、ぜひともご協力をお願いします。

今年も地域で活躍、けや中生!!

今年もけや中生が地域のお祭りで活躍することができました。けやき台祭りでは美術部のみなさんがポスターを描いてお祭りを盛り上げ、ボランティアで応募した生徒が受付をしたり、販売のお手伝いをしたりしました。地域のお祭りで大活躍してくれたこと、とても嬉しく思います。